

石川栄耀の“夜”の思想

照明活動を通して

学部 正会員 矢部 早知子（早稲田大学）

序論 0-1 はじめに

都市は一日のうちにも大きくその表情を変える。昼間は太陽に照らされその姿を赤裸々に我々に示す。やがて陽が傾いて街が闇に包まれてくると、次第に灯りがともされ、夜という真っ黒のキャンバスに様々な色の光と言う名の絵の具をぶちまけた一枚の美しい絵のような夜景という新たな姿で私たちの前に現れる。こうも都市の姿を変化させる昼と夜とは一体何であるのか。建築や都市が、昼と夜という時間帯を有する地球上に存在する以上、この二者に独特の性質を認めその関係を考察することは有意義であると考えられる。

0-2 研究の目的と方法

考察する上での具体的な題材を求めて建築史を辿る中で、夜景の研究を発見した。堀田典裕氏の「近代都市空間における夜景の意匠―汎太平洋平和博覧会について―」¹である。名古屋で昭和12年（1937）に開催された汎太平洋平和博覧会を主としてその夜景の意匠を調査し、都市美の観点から考察した研究であるが、その中で当時の都市計画家が夜景をどうとらえていたかを示す事例として石川栄耀（1893-1955）が挙げられていた。石川は独自の「夜の都市計画」を以てしてその時代の照明に挑んだという。石川は明治から昭和にかけて名古屋や東京を中心とした日本の広域にわたる都市計画に携わっており、今日においても日本の都市計画学界で最も栄誉のある賞として「石川賞」が設けられる程高名な都市計画家である。これまでの石川栄耀についての研究は、土地区画整理や戦災復興や盛り場研究などの都市計画政策を中心としたものが主であり、照明研究については石川の盛り場研究の一環として紹介されるに留まっている。しかし、「夜の都市計画」と称して独自の都市計画を展開し、自身も照明学会の会員として積極的に活躍、書籍も出版するに至る石川は当時の照明家たちからもユニークだと捉えられ、一目おかれていた。実際、照明研究の大家である関重広（1892-1982）は、石川の論文集『余談亭らくがき』²の後書きにおいて、昭和5年（1930）に照明学会主催の講演会で初めて石川の講演を聴き、石川の都市美の視点からの照明論のユニークさに大変感銘をうけたこ

とや、石川の死が「照明界に於いても、先生程専門外の立場から吾々を指導された方はいないのでは、この意味に於いても、私は照明界の大損失だと信ずる」等という感想を述べている。こうした斬新な石川の照明研究は、十分単独で研究されるに値するものだと考え、本研究において昼と夜の関係を考える題材として用いることを決意した。

0-3 既往研究

石川栄耀の都市計画に関しては中島直人氏・西成典久氏・初田香成氏・佐野浩祥氏・津々見崇氏の『都市計画家石川栄耀～都市探求の軌跡～』³が詳しく、生涯にわたる石川の業績が網羅されている。また、照明については前述した堀田氏の論文に加え、Schivelbusch Wolfgang 氏の『闇をひらく光 19世紀における照明の歴史』⁴や橋爪紳也氏・西村陽氏の『につぼん電化史』⁵で、近代において照明が普及し研究されていった過程が述べられている。

第一章 「夜の都市計画」の考案と照明への接近

1-1 はじめに

石川が「夜の都市計画」や照明という発想を得るに至る過程には海外視察旅行での体験が大きく関わっている。第一章では石川が“夜”及び照明へ接近する過程とその後の活動を具体的に研究した。

1-2 「夜の都市計画」に至るまでの経緯

内務省の都市計画名古屋地方委員会に採用された後、大正12年（1923）から石川は海外視察旅行で欧州へ旅立っている。その際にイギリスで都市計画家レイモンド・アンウィン（Raymond Unwin: 1863-1940）と面会し、アンウィンから石川の都市計画が「産業そのもの」であり「人生を欠いている」と指摘された。その指摘を石川は次の様に独自に解釈し、「夜の都市計画」への契機としている。曰く「本当の人生計画から云へば産業時間であるところの月火水木金土のしかも昼間が余暇で、普通余暇と称してるそれ以外の時間こそ正味である。都市計画はすべからく此の人生の本態である正味の計画から初めその余地で産業計画をせよ」と。この、余暇と見なされている休日と夜こそが都市計画において主体をおくべき時間だという思想は、大正14年

(1925)に「郷土都市の話になる迄 断章の二、夜の都市計画」⁶で初出している。また、この海外視察旅行中に照明（特にネオン）に感銘を受けた⁷ことが、後の照明への研究への発端だと考えられる。

1-3 照明学会員としての活動

帰国後長野県上田市の都市計画に失敗して盛り場研究に興味を持った後の昭和3年(1928)に、石川は照明学会東海支部の庶務幹事に就任している。

ここで石川は講演会や大須商店街の明化運動、名古屋の公演祭りの夜間照明演出等を電気技師や地元の商店街関係者と協力して行なっている。

その後東京に移り照明学会東京支部へ移籍した後も、街路照明委員会(昭和11年に都市照明委員会に再編成)を組織し、交通安全や市民の夜間生活の向上の為に街路照明設置等を定めた都市照明法の制定を政府に訴えた。また、新宿西口広場の照明計画も考案している。その他にも照明知識普及委員会の企画部長を務め、雑誌『照明ニュース』(昭和16年に『照明』に改称)(図1参照)を刊行、自身で『盛り場の照明』『都市美と広告』等の著書も発刊した。(表1参照)



図1『照明ニュース』『照明』

1-4 都市美研究会員としての活動

都市美運動は東京で発生したが、石川はその名古屋での担い手であった。昭和2年(1927)に「名古屋をも少し気のきいたものにするの会」を設立、その後より実践的な「名古屋都市美研究会」を設立して名古屋広小路祭・大須祭り等の祭開催やショーウィンドウ整備など都市美的な立場からも照明活動を行っている。

他にも広島都市美協会・商業都市美協会・都市美協会等に関わり、全国的に都市美運動の立場からの商店街の照明指導を行なった。

1-5 照明界での石川の立場

石川が亡くなった際に『照明学会雑誌』⁸に追悼文が掲載され、石川が商業照明・盛り場の照明の権威であったことや、势力的に照明活動(表1参照)を行なったことが述べられた。そして「照明人として特異の存在であった」と、その立場の斬新さが現れている。石川に関わった照明家達はその都市的な視点を以て照明論に対して斬新さを感じていた様である。また、石川自身は自身が照明においては専門外であることを認めながらも、都市計画家として都市美の立場を自身の足場として照明に強く意見している。そして、照明

単体の問題しか考えずひたすら電球の性能の向上を求める照明家達に対して「明るさと文化との交渉が大切」であり、「明るさが如何なる効果を現すか」や「明るくしなければならないワケはどこにあるか。そこを考えなくてはならない」と、照明家達に新たな視点を与えている。そして、「私は皆さんに、電気屋になる前に街の夜の指導者になって戴きたい」と訴えた。⁹

表1 石川の照明活動年表

明治 26(1893)	誕生
大正 9(1920)	都市計画名古屋地方委員会に赴任
大正 12(1923)	海外視察旅行
大正 13(1924)	アンウィンと面会、夜の都市計画の発想を得る
大正 14(1925)	上田市の商店街計画に失敗し、盛り場研究開始 「郷土都市の話になる迄 断章の二、夜の都市計画」にて夜の都市計画の思想を初出
昭和 2(1927)	名古屋をも少し気のきいたものにするの会設立
昭和 3(1928)	照明学会東海支部庶務幹事に就任
昭和 5(1930)	照明学会講演会において関重広と知り合う 照明応用調査委員として街の照明調査を実施
昭和 6(1931)	「照明効果と明日の都市照明」「照明学会雑誌」にて照明研究を発表
昭和 8(1933)	都市計画東京地方委員会に赴任 同時に照明学会東京支部に移籍 照明知識普及委員会に加わる
昭和 10(1935)	広島商工会議所による東京の盛り場視察受け入れ・指導
昭和 11(1936)	名古屋大須商店街及び広島商工会議所からの東京視察受け入れ
昭和 12(1937)	照明知識普及委員会より『盛り場の照明』を出版
昭和 14(1939)	照明学会都市照明委員会内に特別小委員会を設置し、委員長に就任。新宿西口駅前広場照明計画を立案
昭和 16(1941)	照明知識普及委員会から照明協会へ改称 それに伴い、雑誌名も『照明ニュース』から『照明』へ改称
昭和 19(1944)	戦争に備えた灯火管制の影響により、石川の研究も盛り場照明から国防照明へと移行 『国防と都市計画』出版
昭和 20(1945)	終戦 再び夜の思想を活かした照明活動を展開
昭和 26(1951)	東京都建設局長を退職、早稲田大学理工学部教授に転任。 『都市美と広告』出版 各地の商店街指導に赴く
昭和 30(1955)	永眠

第二章 石川栄耀の「夜の都市計画」 2-1 はじめに

第二章では石川の「夜の都市計画」を、思想と実践を中心に深く読み解いていく。

2-2 言説から見る「夜の都市計画」

2-2-1 「夜の都市計画」の思想

石川は「夜の都市計画」を考える上で、夜が持つ性質について追求した。まず石川は盛り場を「建築物で構成された都市美的な区域であり、そこに於て市民は自由なる関係に於て交歓する」場であると定義¹⁰し、本来はこうした盛り場は昼間の広場に存在し(盛り場の広場時代)、時代とともに規模が拡大(盛り場の路上時代)(屋内盛り場時代)して言った歴史を述べている。¹¹(表2参照)しかし、産業革命に伴う交通革命によって、高速交通機関に路上を占領され、社会は産業が中心となり日中における盛り場が消滅した。つまり人々の生活から遊楽時間が消滅した訳であるが、エジソン(Thomas Edison:1847-1931)が電燈を発明したことにより、それまで暗さ故に使用出来なかった夜の時間帯を人々が利用出来る様になり、ここに遊楽時間が復活した。つまり夜は、本来は昼間が持っていた娯楽的な性質を照明によって持ち得る様になったのであ

る。¹² それに加え、昼には無かった「買い物という享楽を中心とした慰楽性」を夜は持つと石川は述べている。¹³

表2 盛り場の変遷表

	名称	時間	例
1期	盛り場の広場時代	昼	アゴラ、フォーラム、市
2期	盛り場の路上時代	昼	路上スポーツ、大道芸
3期	屋内盛り場時代	昼	カフェ
4期	夜の商店時代	夜	商店街

石川はそうした夜の性質を特に商店街が有するとして「夜の都市計画」の主な計画対象とし、商店街盛り場を改めて「一定の建築群によって構成される都市美的な区域で、商業者は配給作業を果し、市民は商店及び娯楽機関を媒体とし（という事はそれ等を利用しつつ）慰楽し、且つ、友愛を味わう場所」と定義¹⁴し、この性質を活かすような計画の考案を目指した。

2-2-2 「夜の都市計画」の実践

石川は、夜において照明を使用することで昼間以上に効果的に慰楽的な空間を実現しようと考え、研究を行なった。具体的には、照明による視覚的囲い込みでの広場創造（図2参照）、光の照射方向による心理的な印象の分析（図3参照）、色と感情の対応、色と色の組み合わせ効果（図4参照）、広告と照明の連携効果とユーモア性の導入、ネオンの意匠性の追求、店内照明と街路照明の色の検討、象徴的な建物のライトアップ、時節に合って変化する照明配置等を考案している。

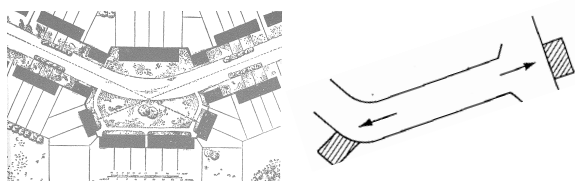


図2 照明による視覚的囲い込みによる広場創造
アンウィンの都市計画手法（左図）を石川が照明的に応用した（右図：斜線部は照出部分）

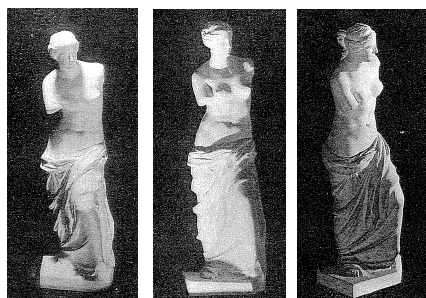


図3 照射方向による心理効果

また、盛り場以外の保安照明や道路照明、国防照明の研究にも取り組んでいた。

2-3 写真から見る「夜の都市計画」

石川が旅行した当時のパリの夜景の写真¹⁵や、石川が照明演出に協力した名古屋公園祭の際の写真から「夜

の都市計画」を分析した。パリでは記念的な建築物のライトアップやネオンの使用が行なわれており、後の石川の照明手法はこれに影響されたと考えられる。また、公園祭では提灯や噴水のライトアップが用いられており、夜の演出に貢献している。



図5 パリ・コンコルド広場

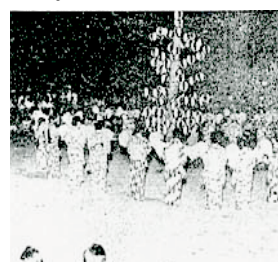


図6 志賀公園の盆踊り

2-4 図面から見る「夜の都市計画」

昭和14年（1939）に東京市土木局長から照明学会に依頼された新宿駅前広場の照明計画を、石川を委員長とする都市照明委員会が計画¹⁶した。計画には歩行者に眩輝を与えない照明器具の使用や電燈による広場の囲い込み、道路舗装材への反射材の使用や灯火管制時への対策等に石川の主張が見られる。昭和15年（1940）

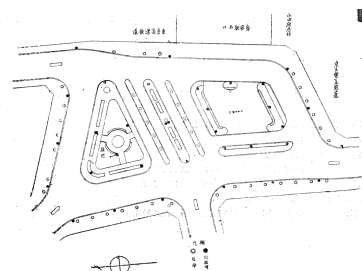
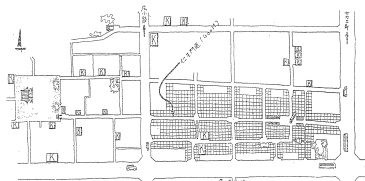


図7 新宿駅前広場計画案

に計画された名古屋大須商店街の都市計画は、石川の指導のもと東京都市計画地方委員会の金井静二によって計画された



ものである。¹⁷ 案を見ると、石川の主張した照明による視覚的囲い込みや広告の使用、ショーウィンドウの工夫等を用いた部分が散見される。しかし、照明や広告による過度なぎやかさの演出は低俗であると述べたり、興行物を通りの突き当たりからずらした場所に配置する等、石川の主張と反する計画も見られる。

第三章 昼と夜の関係性に関する一考察

3-1 はじめに

三章においては、石川の昼の思想と夜の思想を整理し、それぞれの照明活動への反映を分析する。また、その上で昼と夜の関係性について考察する。

3-2 石川栄耀の真意

石川のこれまでの論より再度昼の思想と夜の思想の意味するところを整理すると、昼の思想は産業・勤労・交通、夜の思想は娯楽・慰楽・交歓に分かれ、夜の思想こそが人間の本態に近いものであるとされている。

この思想が実際の石川の照明活動において如何様に影響したかを、都市計画の行われた時間と屋外計画であるか屋内計画であるかで分類を行った。(表3参照)

表3 石川栄耀の照明計画分類表

	思想		対象時間		内外	
	昼 (産業・ 勤労・ 交通)	夜 (娯楽・ 慰楽・ 交歓)	昼	夜	内	外
新宿西口計画 (新宿西口広 場への街灯設 置計画)	○ 車交通・ 歩行の為			○ 夜間照明 の設置		○
国防照明 (残置灯の整 備)	○ 夜間の安 全の為			○ 夜間照明 の設置		○
大須計画 (商店街の活 性化計画)		○ 買い物を中心とした 慰楽の為	○ 商店街の ショーウ ィンドウ 整備	○ 夜間の商店街の照 明計画	○	○
公園祭り (公園での盆 踊り・イベン ト・大会など を計画)		○ 祭による 娯楽・交 歓の為	○ 昼のイベ ントを行 う	○ 花火・ラ イトアッ プ等の実 施		○
道路照明	○ 車交通・ 歩行の為			○ 夜間照明 の設置		○

思想と計画対象時間について見てみると、必ずしも昼の思想が昼の時間帯に反映されるわけではなく、逆も然りであり、思想と計画対象時間は入り組んでおり、必ずしも一致しない。石川は夜の思想に重きを置いている姿勢が散見されるが、その頃すでに石川は照明の普及によって産業や勤労と言った昼の思想が夜に進出することを予測していたのでは無いであろうか。そしてそれを防ぐ為にあえて夜の思想に重きを置いて、その実現に着手したと考えられる。また、表を屋内外で見て行くと、屋外計画が多い。しかし本来照明が最も使用されるのは屋内である。それは外部の昼と夜の影響を受けずに24時間明るさを保てる場であり、また、公共から指図されない個人の領域である。屋内計画にまで深く踏み込めなかったことは、石川が都市計画家という公共の立場であるが故の限界であった。そして、その屋内を昼の思想が浸食して行った結果が“勤労・生産・交通”に重きを置いた現代の社会なのである。

3-3 変動する昼と夜

夜は照明普及以前はその暗さによる危険性や不可思議性を有していた。この夜の暗さに安全性を与えるものが、本来の夜の明るさ(照明)の役割であった。あくまでそれは夜を補うものであり、昼の明るさ(日照)と夜の明るさ(照明)は別ものだったのである。しかし照明器具の性能向上により、昼と同程度の明るさが夜に確保されていくと、昼の明るさ(日照)と夜の明るさ(照明)とが混同され、同時に昼と夜も混同されて同化していく。石川の論をもってして言えば、“娯楽・慰楽・交歓”の場は昼から一度消え去ったものの、

本来は人々が使用出来なかった夜を照明が使用可能したことによって復活した。しかし、照明の明るさを昼間の明るさと混同した現代人によって夜さえも“勤労・生産・交通”と化してきた今、再び“娯楽・慰楽・交歓”の場は消滅しようとしている。過去と違って夜の暗さを克服した今、“娯楽・慰楽・交歓”の場が復活する時間は24時間の中に残されていない。今度こそ永久に人生本態の時間が失われようとしているのである。これを回避する1つの方法として、夜の明るさは“勤労・生産・交通”のための明るさではなく“娯楽・慰楽・交歓”であることを区別することが有効であるが、今後特異な事態が起こらずに夜の明るさが維持されていく以上、ますます“勤労・生産・交通”に人生が支配されて行く現代人の姿が予想される。

結論

以上より、“産業・勤労・交通”を昼の思想、“娯楽・慰楽・交歓”を夜の思想とし、夜の思想を人生本態の時間と見なした上で、その効果的な実現のために照明研究を押し進めた石川の独特の姿が明らかになった。また、かつては明暗によって区別された昼と夜が、現代においては照明の普及による明るさの一定化により同化しつつあり、石川の言う昼の思想が夜へ進出して夜の思想が薄れつつある現代の昼と夜の関係性を明らかにした。石川が照明を用いて実現しようとした夜の思想は、皮肉にも照明の普及によって今まさに失われようとしているのである。

【参考文献】(1)堀田典裕「近代都市空間における夜景の意匠-汎太平洋平和博覧会について-建築史の想像力」『建築史の想像力』学芸出版社.1996.p30-69.なお、初出は堀田典裕「昭和12年汎太平洋平和博覧会について：近代都市空間における夜景に関する史的研究」『東海支部研究報告集』33号.1995年7月.p717-720.(2)『余談亭らくがき』都市美術家協会.1956年出版(3)中島直人、西成典久、初田香成、佐野浩祥、津々見崇『都市計画家 石川栄耀～都市探求の軌跡～』鹿島出版.2009(4)Schivelbusch,Wolfgang 著.小川さくえ訳『闇をひらく光 19世紀における照明の歴史』法政大学出版局.1988.(5)橋爪紳也、西村陽、都市と電化研究会『にっぽん電化史』社団法人日本電気協会新聞部.2005.(6)石川栄耀「郷土都市の話になる迄 断章の二、夜の都市計画」(1)『都市創作』1巻3号.p17.(7)石川栄耀「盛り場とネオン」『余談亭らくがき』都市美術家協会.1956.p81.(8)『照明学会雑誌』1955.39巻10号.p383.(9)石川栄耀「『盛り場照明』読本」『マツダ新報抜粋』1936.p2.(10)石川栄耀「商店街の構成」『商業経営指導講座第一巻』東京商工会議所.1938.p35(11)石川栄耀「都市路上を中心とする市民交歓生活の変遷(上)」『都市公論』1932.15巻12号.p96(12)石川栄耀「『盛り場計画』のテキスト・夜の都市計画」『都市公論』1935.15巻8号.p95.96(13)石川栄耀「盛り場の研究(其二)」『エンジニア』1935.14巻3号.p58(14)石川栄耀『都市計画的に見た商店街さかり場の計画と研究』中小企業庁.1953.p2(15)ブラッサイ『夜のパリ』みすず書房.1988(16)『照明学会雑誌』24巻8号(17)金井静二「名古屋大須の計画-盛り場の都市美計画-」『都市美』30号.1940年6月